

## 中ノ馬場における武家屋敷地の変遷 －福井城下の武家地の研究 その10－

伊豆蔵 庫 喜\*

### The change of the samurai's premises in *Nakano-Baba* －A study on the samurai's premise of the Fukui castle town, part10－

Kouki IZUKURA

This paper considers the change of the samurai's premises in *Nakano-Baba* through 'FUKUI ZOUKA-EZU'. The number of premises was 43 *pitu* in Keicho18 years, and it was 35 *pitu* at the late of Edo period. The allotment of the premises had been changed twice greatly for reasons that made an alteration to the vegetable garden ground in Kanbun9 years and formed drill place (*Tyorenzyo*) in that place in Kaei5 years. At the time of feudal lord change at the Kanei first year, the premises substitute changed greatly. Afterwards that number existed many between Syoutoku4 years and Kanbun9 years. After the Anei4 years, the premises along street were occupied by *Yoriai-seki* and *Zyozabangai-seki*.

#### 1. はじめに

本研究は、『松平文庫』に所蔵されている江戸時代を通して武家屋敷地の屋敷割や居住者がわかる主な城下絵図8図<sup>1)</sup>を用いて、江戸初期から幕末までの武家屋敷地の変遷について検討する。

すでに福井城本丸の西側にある大名町、南側の南三ノ丸における武家屋敷地の変遷について報告した<sup>2)</sup>。その結果、大名町と南三ノ丸の屋敷割は慶長18年(1613)～万治2年(1659)の大火前までに大きく変わり、居住者の多くは屋敷替えしていた。その後、大名町は万治2年と寛文9年(1669)の2度の大火による屋敷割の変化および貞享3年(1686)の大法<sup>3)</sup>や享保6年(1721)の松岡藩の併合<sup>4)</sup>に伴う屋敷替えはほとんどなかった。一方、南三ノ丸は寛文の大火や貞享の大法の影響とみられる屋敷替えが多く、大名町ではみられなかった勘定所や評定所、御用所など藩の施設が設けられていたことなどを指摘した。

本稿は同じ城下絵図を用いて、本丸の東南方にある中ノ馬場における武家屋敷地の変遷について考察する。中ノ馬場は百間堀の東側に広がる湾曲した曲輪で、三ノ丸に相当する(図1参照)。

#### 2. 城下絵図にみる中ノ馬場

前述した8枚の城下絵図にみられる中ノ馬場の武家屋敷地の様子を巻末に示した(史料1～8)。これらの絵図に記されている各屋敷地の居住者を年代別にまとめたものが表1であり、図1は8図の中で最古の『北庄家中図』の屋敷割を書き起したものである。なお、図中に記した番号は筆者が便宜上付けたもので、表1の屋敷地番号に対応している。ただし、図1にみられる各屋敷地の大きさや形状に関してはやや正確性に欠ける。

\* 建設工学科建築学専攻

**(1) 慶長 18 年以前 (付図－史料 1)**

慶長 18 年頃の中ノ馬場の屋敷地は 43 筆で、坪数は 154 坪から 4598 坪まで広範囲である。200 坪以下が 2 筆あり、200 坪～800 坪が 29 筆で、1000 坪以上は N-2 (結城晴朝家) と N-21 (水戸三七家) の 2 筆だけである。1000 坪以上の 2 筆は、ともに大野に通じる街道(イ)沿いにあり、なかでも 4598 坪で最大の N-2 は藩祖秀康の養父、結城晴朝の屋敷である。また、百間堀沿いの N-11～14 や通り(チ)の両側にある N-21～24 の屋敷地も大きめで、(ハ)と(ニ)の通りに挟まれた一画(N-29～35)はそれより小さく、北東端の通り(リ)の東側(N-37～N-43)の屋敷地はさらに小さい。

N-25 の屋敷地に「永見民部 後、海福久右衛門」とあり、慶長 18 年以前に屋敷替えがあったことがわかる。また、N-38 は居住者が記されていないことから、空き地の可能性が高い。

**(2) 万治 2 年大火以前 (史料 2)**

慶長 18 年～万治 2 年の大火前までの間に N-15 と N-16、N-19 と N-20 など 6 例がそれぞれ合筆している。対して分筆は、最大の N-2 が坊主頭や西尾源太右衛門家など 5 筆に分けられ、N-11 が 2 筆(小倉庄右衛門家・小倉新五右衛門家)に分筆されている。

居住者をみると、N-31 の永井清三郎家と N-40 の波々伯部九兵衛家以外は、慶長 18 年～万治 2 年の大火前までにすべて替わっていて、大規模な屋敷替えがこの時期に行われたことがわかる。

N-1 に寄合席<sup>5)</sup>の酒井十之丞家、N-28 に同じ寄合席の中川空之助家がそれぞれ入り、N-5 と N-25、N-41～42 の 3 筆は空き地になっている。

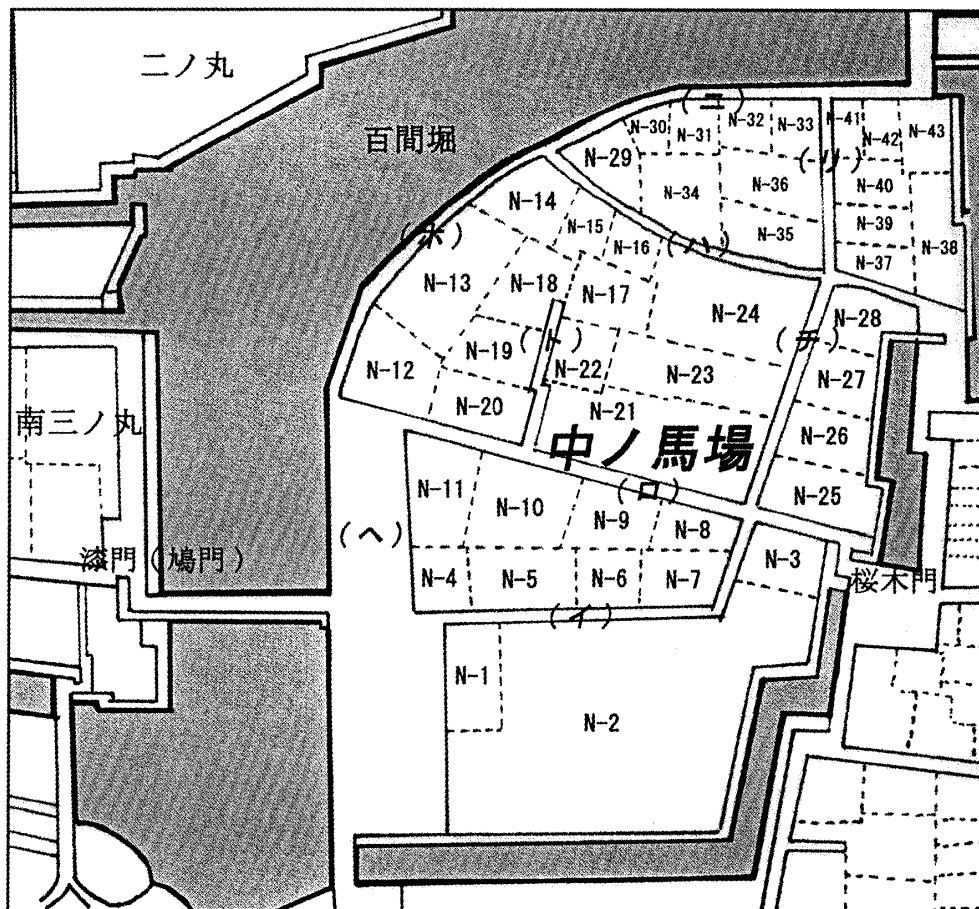


図 1 慶長期における中ノ馬場の屋敷割

表1 各時代における武家屋敷地の居住者(中ノ馬場)

町名	屋敷地番号	年代								
		慶長18年 (1613)	坪数 (坪)	万治2年(大火前) (1659)	寛文年間(大火前) (1661~72)	貞享2年 (1685)	正徳4年 (1714)	安永4年 (1775)	文化8年 (1811)	慶応年間 (1865~67)
中ノ馬場	N-1	林九郎右衛門	780	酒井十之丞	酒井十之丞	多賀谷權太夫	水野善左衛門		水野	(調練場)
	N-2	結城晴朝(大和守下屋敷) 三好重右衛門	4598	坊主頭	堀勘左衛門	堀平兵衛			渥美	
				西尾源太右衛門	西尾源太右衛門	西尾十之丞	西尾源太右衛門		永見	
				天方	坊主頭	柄田喜兵衛	塚田弥左衛門		堀	
				秋田	福田孫左衛門	宮下四郎	宮下四郎		大野	
				西尾源太右衛門	水野瀬兵衛	栗崎道喜	真下宗円		柘植	
	N-3	原平左衛門	588	永見六郎右衛門	永見六郎右衛門	仙石三左衛門	仙石右近		多賀谷	多賀谷多
	N-4	(御馬屋)	775	勝田与兵衛	勝田与兵衛	浅田左内	奈良左近右衛門	(御預役所)	小林	小林八右衛門
	N-5	古田大学	500		藤田市郎右衛門	海福市蔵	横井庄八	野村拾太夫	野村	野村重太夫
	N-6	長谷川宗右衛門	391	牧野九郎右衛門	長谷川仁兵衛	長谷川仁兵衛	長野八太夫	上月九郎左衛門	上月	上月久右衛門
	N-7	鷺山伝八	376	牧野猪右衛門	牧野猪右衛門	石川七之助	周防猪左衛門		三寺	三寺剛右衛門
	N-8	蛟島仁右衛門	400	海福瀬左衛門	牧野九郎左衛門	牧野九郎左衛門	大崎左太夫		小栗	小栗治右衛門
	N-9	相沢善右衛門	480	竹村八郎右衛門	竹村八郎左衛門	出淵七兵衛	出淵平兵衛		出淵	出淵傳之丞
	N-10	留鎌源五右衛門	492	仙石勘十郎	仙石勘十郎	仙石喜右衛門	仙石元作	仙石逸平	仙石	仙石喜左衛門
	N-11	原隼人	837	小倉庄右衛門	小倉庄右衛門	牧野主殿	岡部右京	牧野主殿	牧野	牧野實
				小倉新五右衛門	小倉新五右衛門					
	N-12	都筑三郎左衛門	784	大宮彦右衛門	大宮彦右衛門	御菜園	御菜園	花畠	花畠	花畠
	N-13	近藤縫殿	925	荻野小太膳	荻野小太膳				長尾	
	N-14	上村因獄	■	井河平右衛門	井河平右衛門					多賀谷下屋敷
	N-15	岡部宗次郎	225	比企佐左衛門	比企佐左衛門	比企佐左衛門	小木儀右衛門		清田	清田基
	N-16	柘植小平次	210	比企佐左衛門	比企佐左衛門	比企五郎右衛門	比企五郎右衛門		坂井	坂井権左衛門
	N-17	横倉七兵衛		仙石権右衛門	仙石権右衛門	永見権左右衛門	牧野清兵衛下屋敷		牧野下屋敷	牧野下屋敷
	N-18	野本弥次兵衛	418	田代養山	田代養山	松原安之丞	御菜園	花畠		花畠
	N-19	柳下由右衛門	352	山田伊織	山田伊織	山田伊織	山田多仲	山田次郎太夫	山田	山田夢仲
	N-20	日下部左馬助	648	山田伊織	山田伊織	山田伊織	山田多仲	山田次郎太夫	山田	山田夢仲
	N-21	水戸三七	1200	堤安右衛門	堤安右衛門	堤基三郎	笹治兵庫		中川	中川潤
	N-22	岩木勘平	564	松原角左衛門	松原角左衛門	松原三郎兵衛	松原角左衛門		細垣	細垣治郎
	N-23	岸内匠	468	榊原十郎左衛門	榊原十郎左衛門	榊原十郎左衛門	榊原十郎左衛門		花木	花木右門
	N-24	乙部九郎兵衛	810	榊原十郎左衛門	榊原十郎左衛門	榊原十郎左衛門	榊原十郎左衛門		海福	海福瀬左衛門
	N-25	永見民部 (*海福久右衛門)	754		海福瀬左衛門	海福九右衛門	海福瀬左衛門		久世	久世外土
	N-26	前田平左衛門	609	東郷仁右衛門	東郷仁右衛門	東郷仁右衛門	東郷三郎右衛門	東郷仁助	東郷	東郷三三郎衛門
	N-27	真瀬利左衛門	276	飯川彦兵衛	飯川彦兵衛	小川治兵衛	小川与左衛門	小川数吾	小川	小川治兵衛
	N-28	妹尾右馬介	991	中川奎之助	中川奎之助	中川六左衛門	中川主殿	中川六左衛門	鈴木	鈴木小三三郎 島川久左衛門
	N-29	中池半兵衛	750	山本五郎左衛門	山本五郎左衛門	御菜園	御菜園	花畠	花畠	花畠
	N-30	稲垣五左衛門	221	一色長左衛門	一色長左衛門					
	N-31	永井五左衛門	221	永井清三郎						
	N-32	吉田与兵衛	165							
	N-33	朝比奈利兵衛	414	土屋十郎右衛門	土屋十郎右衛門					
	N-34	土屋市兵衛		石川太右衛門	石川太右衛門					
	N-35	牧野右衛門太郎		嶋田清左衛門	嶋田清左衛門					
	N-36									
	N-37	大石半弥	330	福井庄左衛門	福井庄左衛門	坂井善八	坂井■八	真田主税	高村	高村四郎左衛門
	N-38			水野彦右衛門		久嶋武太夫	平岡金右衛門	平岡仁左衛門	林	林矢五郎
									平岡	平岡十三郎
	N-39	多田六太夫	525	那須左五右衛門	那須左五右衛門	飯田藤次郎	浅見徳右衛門	長谷部治郎兵衛	雨森	雨森宇右衛門
	N-40	波々伯部九兵衛	585	波々伯部九兵衛	波々伯部九兵衛	波々伯部小右衛門	斎藤民部	斎藤善五郎	斎藤	斎藤主幹
	N-41	国枝又一				関治平次	鈴木四郎右衛門	伊藤太郎兵衛	伊東	伊東六郎兵衛
	N-42	真瀬万休	154							
	N-43	安藤甚左衛門	546	長嶋彦十郎	長嶋彦十郎	根来半兵衛	根来清太夫	奈良太郎左衛門	奈良	奈良半之丞

\*1: 慶長18年の坪数は、絵図にある間口・奥行の寸法から算出した。

\*2: 空欄は空き地を、網かけは付紙の剥がれた屋敷地を示している。

\*3: 太字(斜め字)は寄合席、斜め字は定坐番外席を示している。

\*4: ( )内は藩の施設を示している。

**(3)寛文9年大火以前(史料3)**

万治2年の大火後、福井城下は本丸の西北にあった多くの寺院を城下北端部に移転させ、その跡地を町人地とするなど大きく変わっている。しかし、中ノ馬場においては先の万治2年の大火前に5筆に分筆したN-2のうち、西尾源太右衛門家が再度分筆し1筆増えているだけである。

屋敷替えは9件あるが、分筆して6筆に増えたN-2に堀勘左衛門家や津田小左衛門家ら4家が新たに入った以外、万治2年の大火前にN-6にいた牧野九郎右衛門家がN-8に替わり、N-8にいた海福清左衛門家がN-25に移るなど中ノ馬場の区画内での転居が3例みられる。

**(4)貞享2年(史料4)**

寛文9年の大火後～貞享2年(1685)にかけても福井城下の屋敷割は大きな変化がみられる。中ノ馬場でも同様に、百間堀沿いのN-12～14の3筆とN-29～35の7筆が菜園地に変わっている<sup>6)</sup>。しかも菜園地になったN-14の東側に路地が新設され、この路地と慶長18年以来、N-20とN-21の間の袋小路(ト)が繋がっている。この他、寛文9年時に分筆したN-2が再び合筆した例や、N-11が合筆するなど貞享2年の屋敷地は34筆で、寛文9年の大火前より9筆減っている。

屋敷替えはN-1に多賀谷権太夫家、N-11に牧野主殿家がそれぞれ大名町から転居したのをはじめ、前述のように百間堀沿いの武家屋敷地10筆が菜園地にかわるなど18件確認できる。

**(5)正徳4年(史料5)**

正徳4年(1714)の屋敷地は35筆で、貞享2年時より1筆増えている。これは万治2年の大火前までに合筆したN-15が再度分筆したことによる。

屋敷替えはN-1が多賀谷権太夫家から水野善左衛門家に、N-4が浅田左内家から奈良左近右衛門家に替わるなど17件あり、特にN-18は松原安之丞家から菜園地に替わっている。

**(6)安永4年(史料6)**

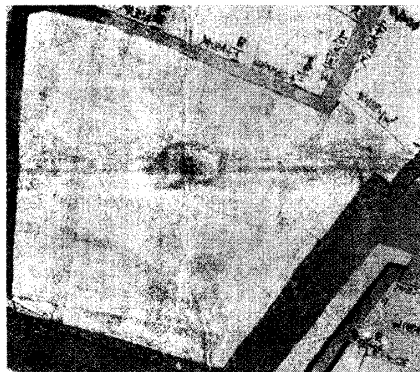
安永4年(1775)の屋敷地は35筆で正徳4年と同じであるが、合筆(N-15とN-16)と分筆(N-22)がそれぞれ1例ずつみられる。

安永4年の史料6は居住者を示す付紙が剥がれている屋敷地が多い。判明するものではN-5が横井庄八家から野村拾太夫家に、N-6が長野八太夫家から上月九郎左衛門家に替わったほか、貞享2年時にはN-11にいた牧野主殿家が再びN-11に移るなど屋敷替えは8件みられる。そのほとんどが武家同士の転居であるが、N-4のみ奈良左近右衛門家から藩の御預役所に替わっている。

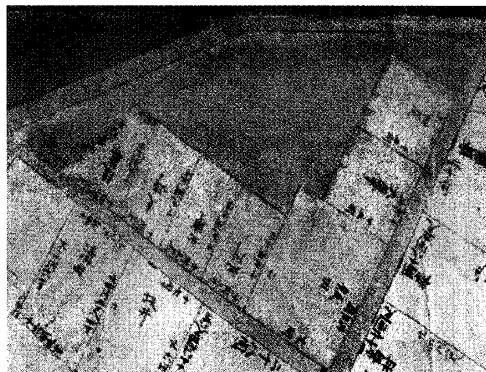
**(7)文化8年(史料7)**

文化8年(1811)の史料7にみられる屋敷地は40筆で、安永4年～文化8年の間に合筆が1例、分筆が11例ある。ところが南端のN-2は敷地全体が白紙で隠され(後掲の図2-左図)、西北隅のN-29～33の一部は後藤家や飯田家など7家の屋敷地を示す付紙が貼られている(図2-右図)。ただし、付紙の下に前者は永見家や水野家など6家の屋敷割が示され、後者は花畠と記されている。したがって、絵図が描かれた文化8年時にはN-2が永見家や水野家など6家の屋敷地であり、N-29～33の一面は花畠であった。なお、貞享2年～安永4年までみられたN-14とN-15の間の路地は無くなっている。

この間の屋敷替えは7件でN-21が寄合席の中川家、N-23が同じ寄合席の稲垣家、N-24が定坐番外席<sup>7)</sup>の花木家に替わっている。さらに、先の安永4年時に御預役所に替わったN-4は小林家と荻野家になっている。この頃から百間堀沿いのN-11や通り(チ)の西側にあるN-21～24の通り沿いの屋敷地が寄合席や定坐番外席に与えられている。この状態は幕末まで続いている。



(南端、N-2付近)



(西北隅、N-29～33周辺)

図2 文化8年『福井分間之図』にみる中ノ馬場(部分図)

### (8) 慶応年間(史料8)

慶応年間(1865～67)の屋敷地は35筆で、文化8年時より5筆減っている。これはN-1とN-2が合筆して藩の調練場になったことによる。この調練場は嘉永5年(1852)に藩の強兵策に伴い、中ノ馬場の南端に設置されている<sup>8)</sup>。したがって、図2のN-2の白紙は文化8年以後に修正された可能性が高い。一方、N-29～33の一面は再び花畠になっていることから、文化8年以降に屋敷替えした後藤家や飯田家など7家もやはり慶応までに替わっている。なお、文化8年時に無くなったN-14とN-15の間の路地が再び設けられている。

屋敷替えはN-1とN-2が調練場にかわった以外、空き地であったN-14が多賀谷家の下屋敷になり、分筆されたN-28のひとつに新たに島川久左衛門家が入るなど3件みられる。

### 3. 武家屋敷地の変遷

以上、慶長18年～慶応までの中ノ馬場の屋敷割と屋敷替え、空き地の件数を表2に示した。

表2 各時代の屋敷割と屋敷替えの件数

[中ノ馬場]		単位:筆							
年代 屋敷地数	年代	慶長18年 (1613)	万治2年 (1659)	寛文年間 (1661～72)	貞享2年 (1685)	正徳4年 (1714)	安永4年 (1775)	文化8年 (1811)	慶応年間 (1865～67)
	屋敷割								
	合筆		6	0	4	0	1	1	2
	分筆		7	2	0	2	2	11	2
	総数	43	42	43	34	35	35	40	35
	屋敷替え	2	37	9	18	17	8	7	3
	変化なし		2	31	14	17	10	13	32
	空き地	1	3	3	2	1	17	20	0

\*1: 付紙が剥がれた屋敷地は空き地を含む。

\*2: 付紙が剥がれた屋敷地からの変化は空き地に含めた。

ただし、貞享2年の菜園地に変ったN-29～35は屋敷替えと判断した。

#### (1) 屋敷割

慶長18年にみられた中ノ馬場の屋敷地43筆は、万治2年の大火前までに合筆が6筆、分筆が7筆あり、42筆に減っている。その後、万治2年の大火後～寛文9年の大火前までに分筆が2筆あり、43筆に戻っている。

その後、寛文9年の大火後に百間堀沿いの武家屋敷地が菜園地に変わったため34筆に減少し、さらに貞享2年～安永4年までに合筆や分筆が1～2筆ある。その後は分筆が多く、文化8年に40筆になるが、慶応には5筆減って35筆に変わっている。なお、嘉永5年に調練場が南端に設置され、それまであった武家屋敷地が取り払われている。

## (2)屋敷替え

屋敷替えが最も多いのは、慶長18年頃～万治2年の大火前の37件である。慶長18年から万治2年までは約40年あり、慶長期の絵図にみられる原平左衛門や日下部左馬助、海福久右衛門などの名前は忠昌時代の給帳にあるが、結城晴朝や鮫島仁右衛門、相沢善右衛門など多くの名前は無い。逆に万治2年の大火前の絵図にみられる大宮彦右衛門や松原角左衛門、比企佐左衛門などは秀康時代の給帳にはなく、忠昌以降の給帳にみられる<sup>9)</sup>。したがって、寛永元年(1624)に忠昌が越後高田から入部した際、藩士も一新され大幅な屋敷替えがあったとみてよい。

その後、寛文9年の大火前までは9件で少ないが、寛文9年～正徳4年にかけて17～18件と多い。これは寛文の大火後に武家屋敷地が菜園地になったことや貞享の大火に伴う屋敷替えに関連する。その後は正徳4年～文化8年の間に7～8件、慶応までに3件みられる。また、安永4年以降は中川家や花木家など寄合席や定坐番外席の家に、通り沿いの屋敷地が与えられている。

## 4. おわりに

以上、中ノ馬場における武家屋敷地の変遷を検討した結果、以下のことが指摘できる。

- 1) 屋敷割はN-2を除いて、慶長18年～寛文9年の大火前まではほとんど変わっていない。その後、寛文9年の大火後の菜園地への変化および嘉永5年の調練場設置のため、屋敷割は2度大きく変わっている。
- 2) 屋敷替えは寛永元年の忠昌入部の際、大きな変化があったものと考えられる。それ以降、寛文9年の大火後～正徳4年にかけて屋敷替えは特に激しく、中ノ馬場は寛文の大火や貞享の大火の影響を強く受けた地区といえる。
- 3) 安永4年以降、通り沿いの屋敷地を寄合席と定坐番外席の家が占めている。

### 【註】

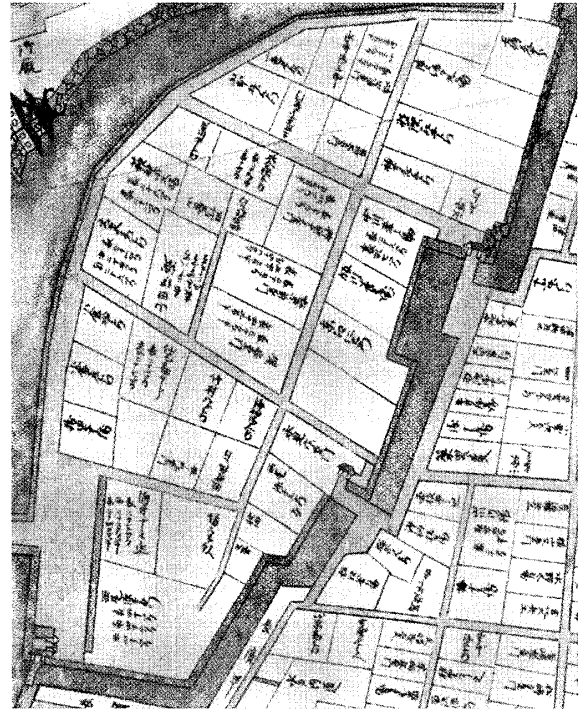
- 1) 8枚の城下絵図はすべて、松平宗紀氏所蔵『松平文庫』福井県立図書館保管
- 2) 拙稿「大名町における武家屋敷地の変遷」福井工業大学研究紀要37号(2007.5)と「南三ノ丸地区における武家屋敷地の変遷」日本建築学会北陸支部研究報告集50号(2007.7)
- 3) 貞享3年(1686)に福井藩は47万5000石から、25万石に半減された。その際、1000人余りの藩士が禄を失い、城東一帯や足羽川南岸の毛矢町など武家屋敷地の多くは空き地となっている。
- 4) 享保6年(1721)12月、松岡藩主昌平が宗昌と改名して福井藩を相続し9代藩主となった。その結果、福井藩は松岡藩5万石を併合して30万石となり、松岡藩士も昌平とともに福井城下へ移り住んでいる。
- 5) 福井藩の寄合席は、高知に次ぐ家格であり、牧野家や中川家など39家が江戸時代を通して継承している。
- 6) 寛文9年の大火以降、中ノ馬場の百間堀沿いの武家屋敷地を移転させ、その跡地を火除け地として菜園地にしている。『福井市史 資料編別巻 絵図・地図』福井市(1989)p45 参照
- 7) 福井藩の定坐番外席は、高知・寄合に次ぐ家格で鈴木家や海福家など13家が継承している。
- 8) 『稿本福井市史(上)』福井市役所 歴史図書社(1973.1)p136 参照
- 9) 松平宗紀氏所蔵『松平文庫』福井県立図書館保管、『源秀康公御家中給帳』、『隆芳院様(忠昌)御代給帳』、『大安院様御代給帳』などを参考にしてしている。『福井市史 資料編4 近世2』福井市(1999)所収p202～p384

付図 城下絵図にみる中ノ馬場の武家屋敷地(1)



史料1. 慶長18年以前(～1613)

(1309. 『北之庄城郭図』)



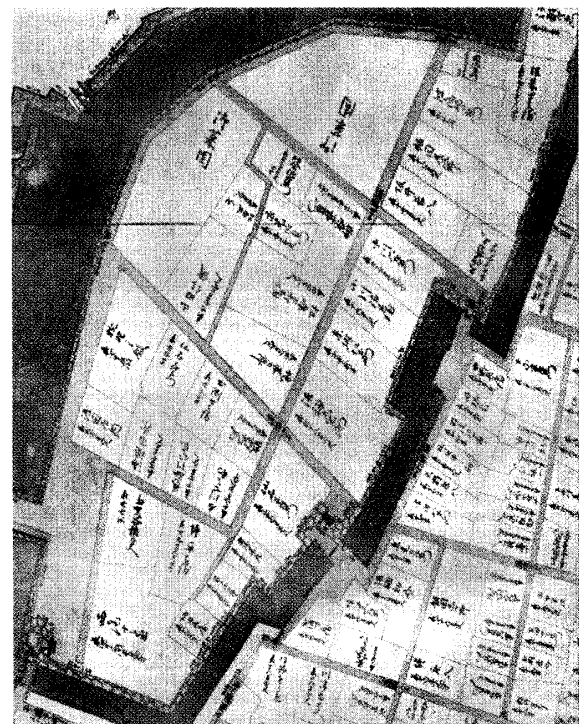
史料2. 万治2年大火前(1659)

(1315. 『御城下之図』明治期複製)



史料3. 寛文9年大火前(1669)

(1319. 『御城下絵図』)



史料4. 貞享2年(1685)

(1320. 『福居御城下絵図』)

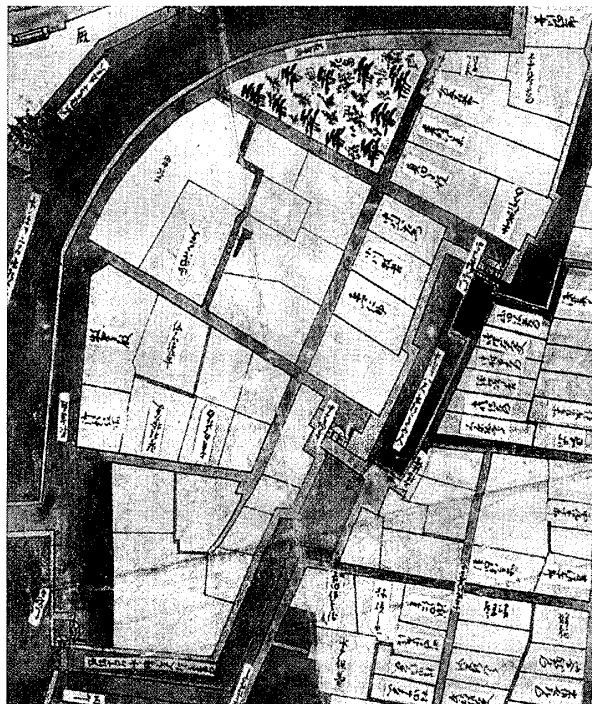
(城下絵図はすべて『松平文庫』より)



付図 城下絵図にみる中ノ馬場の武家屋敷地(2)



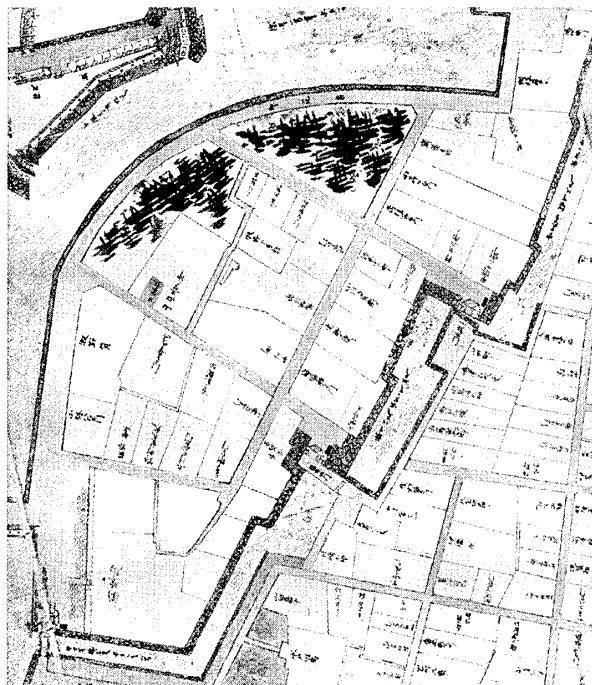
史料5. 正徳4年(1714)  
(1325. 『御城下之絵図』)



史料6. 安永4年(1775)  
(1336. 『御城下絵図』)



史料7. 文化8年(1811)  
(1340. 『福井分間之図』)



史料8. 慶応年間(1865~67)  
(1342. 『御城下之図』明治14年復原)  
(城下絵図はすべて『松平文庫』より)

\*:各絵図の下段、左隅の番号(4ヶ所)は、所蔵機関『松平文庫』の記号である。

(平成20年3月31日受理)